

令和 8 年 8 月 28 日

令和 7 年度 特別の教育課程の実施状況等について

大阪府		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
大阪教育大学附属天王寺小学校	国立大学法人大阪教育大学	国立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
大阪教育大学 附属天王寺小学校	https://www.tennoji-e.oku.ed.jp/

※必要に応じて行を追加すること。

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
大阪教育大学 附属天王寺小学校	http://www.tennoji-e.oku.ed.jp/school/guides/	http://www.tennoji-e.oku.ed.jp/school/guides/

※必要に応じて行を追加すること。

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ・計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ・実施している
- ・実施していない

<特記事項>

毎月 15 日を「STEAM DAY」として位置づけ、全学年で通常の時間割の枠を超えたまとまった時間を確保し、教科横断的かつ体験的な学習を設定している。

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

本特例は、STEAM 教育の推進を基盤とし、組織的なカリキュラムの改善と再構成を持続的に行う「カリキュラム・マネジメントの動的サイクル」の実現を目標としている。本校では 2020 年度からの取り組みにより、教科横断的な視点から年間カリキュラムを構築する基礎的な土台は形成されていた。今年度は、教員間の実践経験や知識のギャップ、また個人の主観に留まりがちだった日々の授業評価という課題を克服するため、「Progress シート」や「Try STEAM シート」を活用した対話的プロセスを導入した。これにより、教員同士が日常的に授業の課題や成果を語り合う協働的な対話の場が創出され、個々の悩みや問題意識を組織全体の学びに昇華させることができた。実践を重ねる中で、教員の意識は従来の孤立や葛藤から「共創」や「結びつき」へと質的転換を遂げ、柔軟にカリキュラムを改善し続けるサイクルが確立された。一方で課題としては、紙面や口頭での振り返りが主となる低学年において、ICT を活用した評価データの持続可能な蓄積が困難であることが挙げられる。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

本校の STEAM 教育は、学校教育目標「個が生きる学校」の理念を核とし、児童と教職員双方の個性を生かす教育活動として展開されている。教職員においては、形式的な指導案から脱却し、経験年数に関わらず一人の実践者として自身のリアルな課題感（問題意識）を起点に授業改善に取り組む同僚性が構築された。児童に対しては、例えば第 5 学年の国語科を核とした実践において、物語の読解と図画工作科の表現活動を深く結びつけることで、児童の「メタ認知能力」と「創造性」を引き出す指導を行った。児童自身が「なぜこの構図や色彩を選んだのか」を言語化しながら表現することで、各教科の本質的な学びが統合され、実践的な能力の育成に寄与している。このような実践の積み重ねにより、未知の課題への挑戦を後押しする組織風土が醸成され、主体的な学びの場が構築されている。

4. 課題の改善のための取組の方向性

今後の課題である「低学年における持続可能な評価サイクルの確立」に向けて、新たに「ヒューマン・イン・ザ・ループ」の手法を試行・検討していく。具体的には、全学年が評価サイクルに参画できるよう、低学年児童のアナログな表現や素朴な発話を、まずは教員の専門的な眼でみとり、その後、音声入力や生成 AI を活用して効率的にデータ化させる仕組みの構築を目指す。評価を完全に自動化させるのではなく、本校がこれまで蓄積してきた「教員の解釈や対話」をシステムに介在させることで、教員の業務負

担軽減と授業改善を両立させていく。

本校における「STEAM 科」としての取り組みは令和 7 年度をもって終了となるが、令和 8 年度からは新たに教育研究開発学校の指定を受け、「情報活用能力の育成」をねらいとした教育課程の編成・実施へと移行する。前段で述べた生成 AI 等を活用した新たな評価手法の構築や、STEAM 科の実践を通して培ってきた教員間の対話を基盤とする「動的なカリキュラム・マネジメント」は、まさに次なる情報活用能力育成の基盤として直結するものである。今後は、これまでの成果を発展的に継承し、学校全体で自ら問いを立て次代のカリキュラムを創造していく「学び続ける教師」集団としての実践を継続していきたい。